

【研究ノート】

ヨーロッパ文学における楽園 III

——ヘシオドスにみる「死すべき人間」の幸せ——

福 地 明 子

(1)

楽園Ⅱにおいて聖書における楽園をみた。次にギリシャ・ローマをみていきたい。ギリシャ・ローマと一括りに言いがちであるが、実際には歴史的にかなりの違いがある。前 1800 年頃すでにギリシャにはミュケナイ文明があった。伝説ではローマが双子のロムルスとレムスに建国されたのは、前 753 年といわれている。そのローマにウエルギリウス (Publius Vergilius Maro, 70-19B.C.) が登場するのはそのおよそ 700 年後のことである。しかしギリシャにヘシオドス (Hesiod, c. 700B.C.)¹ が登場したのは伝説のローマ建設と同時期であり、ホメロス (Homer, c. 800-900B.C.) にいたってはさらにその 1・2 世紀も前である。ラテン文学はギリシャ文学を受容して始まったといわれており、ギリシャ・ラテンは分けて考えるべきであろう。

ヘシオドスの *Works and Days* (『仕事と日』) の訳者 David W. Tandy と Walter C. Neale によれば、前 1800 年頃にはギリシャ周辺にはいくつかの政治・経済的力の中心地があり²、後世のギリシャ人たちはそれをギリシャ神話の英雄と結びつけ、アガメムノン (Agamemnon) のミュケナイ、メネラオス (Menelaus) のスパルタ、オイディプス (Oedipus) のテーベ、セーセウス (Theseus) のアテネ、ネストール (Nestor) のピュロスがその中心たる都市国家であった。こうした文明をまとめてミュケナイ文明と呼んだのはアガメムノンの卓越性からである。都市国家の重要性や経済活動を記録しているのは、線文字 B と呼ばれる、ギリシャ語を表記する音節文字で刻まれた粘土板であった。粘土板が残ったのはそれを所有していた建造物が燃えたからであり、大火災こそがギリシャ文明が一つの変化を経験していたことを明示していると二人は言う。この文明は前 1150 年頃滅び始めたが (トロイが陥落したのはその少

¹ 本論においてはギリシャ語の読みについては音引きを用いないこととする。また実際に用いたテキストが英語訳であるため、人名・地名については原則として英語読みを用いた。しかし日本で一般的に使われている呼び名はそれを用いた。

² David W. Tandy & Walter C. Neale, tr., *Hesiod's Works and Days* (University of California Press, 1996), 9. このあたりの歴史については同書に負うところが多い。なお、今後同書への言及は Tandy & Neale と記す。

し前, 前 1200 年頃という), その理由をドーリア系ギリシャ人の侵入とする学者は今はほとんどいないという。前 1200 年から前 1000 年にかけてギリシャの人口は 4 分の 3 まで減ったらしい。入植も減り, 入植地の数も前 13 世紀には 320 ほどあったが, 前 12 世紀には 130 に, 前 11 世紀には 40 までに減った。前 1000 年から前 800 年にかけてのギリシャは停滞気味であり, 外部の世界との関わりも減った。考古学者はいまだ石油ランプを発掘しておらず, ギリシャは文字通り暗い時代であったと Tandy & Neale は言うが, この暗さは無論ランプがないためではなく, この時代について書かれたものがない, すなわち前 1000 年頃から前 800 年頃まではギリシャの暗黒時代なのである。

光が見えたのは人口がギリシャのあちこちで増加した前 8 世紀の前半であった。この頃ギリシャ人は南イタリア・シシリーに植民地を作った。小アジア・黒海沿岸・フランス・スペイン・北アフリカに至る活発な植民活動が始まり, 多くの都市を作り都市は各々が独立しており, それぞれがまた植民都市を作りギリシャ世界は広がっていった。また前 750 年までには新しいアルファベットが生まれていた。Tandy & Neale はこの文字はギリシャと通商があったエウボイア人やフェニキア人によって北シリアからギリシャに入ったとしている (Tandy & Neale, 16)。この新しい文字がホメロスやヘシオドスの叙事詩の freezing (凍結) を可能にしたのはかなり確実だという。この文字はセム系のアラム文字を借りてギリシャ語を表記するように考案されたもので, 発明されたのはフェニキア沿岸のどこかで, 発明したのはギリシャ人よりもセム系の人であった可能性もあると松平千秋氏は言う³。その証拠として氏はヘロドトスがテーベで見た「カドモス文字」に触れ, これがギリシャ・アルファベットの原型だったかもしれないとしている。

前 750 年を過ぎてまもなく、『イーリアス』(*Iliad*)・『オデュッセイア』(*Odyssey*)—前者はトロイ戦争が終わる前の数日間を, 後者はオデュッセウスがイタカ島に帰るまでを扱っている—が現在の形に凍結したと思われる。語られている神話的時代は現実のミュケナイ文明の崩壊と一致している。Tandy & Neale によれば, 両方の詩は極めてギリシャ的であり, 秩序の回復をテーマとしている (Tandy & Neale, 16)。「秩序の回復」は「楽園」につながるものかもしれない。ギリシャには『ギルガメシュ叙事詩』や聖書にあるような楽園意識はないかもしれないが, それに代わるものがあるかもしれない。

本稿はヘシオドスを選び, その楽園観について考え, またそれを書き留めておくことを目的とする。ホメロスではなくヘシオドスを選んだのは, ヘシオドスが自分というものを表現した最古の詩人とされており, 書く意志をもってギリシャ人の神話を体系的に書いたからで

³ 松平千秋訳, 『イーリアス』上 (岩波書店, 2010), 439.

ある。しかしヘシオドスのそばには常にホメロスが存在していたであろう。ホメロスについても少し触れておきたい。

(2)

ホメロスについては、確かなことは二つの叙事詩が残っていることだけで、古代の人々はその作者をホメロスと名づけたのである。またその叙事詩も多様な伝説が纏められたものようだ。丁度「モーセ五書」と呼ばれるものが、いくつかの写本が一人の人物によって纏められた可能性があるように。しかしホメロスが実在の人物かどうか曖昧であるにも関わらず、彼については多くの言及がある。彼は盲目だったとされ（ホメロスとは盲人の意）、誕生の地もいくつかある。ジャクリヌ・ド・ロミイによれば作者である詩人は小アジアと関わりがあり、一時キオス島で過ごしたという。その詩が整備されたのは前6世紀のアテネであり、そのテキストがパンアテーナイ祭りで朗読される詩の基本になったという⁴。トロイが前1200年頃に陥落し、ホメロスが前900-800年頃の人であり、『イーリアス』・『オデュッセイア』が整備されたのが前6世紀、という長大な時間の隔たりを考えれば、二つの作品が言語においても内容においても多様な性格をもっていることは当然であろう。

「ホメロス問題」といわれるものがある。ロミイによると、それは、ドーヴィニャック神父の書いた『学術上の推定読みまたは「イーリアス」論』（1664, 出版1715）に端を発した統一論者と分析論者の議論である。前者は二つの叙事詩が文学的に統一されたものであると主張し、後者は二つは異なる時期に構想され、互いに独立し、複数の詩を集めて整備したものという立場をとる。現在は二つの論は歩み寄っており、二つの叙事詩のある程度の形成過程もわかってきた。叙事詩の中にははるか昔から歌い継がれたエピソードもあり、ホメロスと同じ源からとられたと思われる似た詩もある。（『イーリアス』には『アキレウスの歌』、『オデュッセイア』には「アルゴナウタイ」（アルゴ号乗組員たち）を歌った詩がある。）そしてある時点で、詩人（あるいは詩人たち）が、様々の作品を「一つの全体」へ構成したのだ。「一つの全体」が小さい核ならば、それを別のひとり（あるいは詩人たち）が拡大していったと考える。あるいは、それが現在の作品に非常に近いと考えれば、詩を配置した詩人はホメロス一人だったと考えられる。もっとも『オデュッセイア』は、後継者の一人の作品かもしれないという。

松平氏によれば、ホメロスの伝記も写本で数編あるという。松平氏は『伝ヘロドトス作

⁴ このあたりについては、Cf. ジャクリヌ・ド・ロミイ、細井敦子・秋山学訳、『ギリシャ文学概説』（法政大学出版局、1998）、7-19。

『ホメロス伝』と『ホメロスとヘシオドスの歌競べ』（以下『歌競べ』と記す）を訳し、前者を彼の訳書『イーリアス』（岩波書店）下に、後者を『仕事と日』（岩波書店）に載せている。『ホメロス伝』によれば、彼はアイオリス系の私生児であったが生まれた時は盲目ではなかった。メレス川のそばで生まれたので、母親はメレシゲネス（メレス生まれ）という名前を付ける。スミュルナの一人の男がホメロスの素質を見抜き、母親を説得して結婚する。彼の教育のおかげでホメロスは男の死後彼が経営していた塾の教師になる。詩作に目覚めたホメロスは塾をたたんで彼の才能を買う男と旅に出る。イタケで目を患いその後コロポで失明する。イタケではホメロスはよい医者のお世話になり、またオデユッセウスの伝承を様々知ることができた。スミュルナに帰り詩作に専念するが、生活の糧を得ることができず再び旅に出る。最終的にキオスの町に落ち着き子どもたちに詩を教え、ホメロス（「盲人」）の名で知られるようになる。彼はそこで妻を迎え二人の娘が生まれる。ホメロスは詩の中で人々から受けた恩をその地を歌うことによって返した。旅の途中イオス島で死んだという。最後にヘロドトスは以下のように時代の計算をしている：

- ・アガメムノンとメネラオスのイタリア遠征の 130 年後にレスボスに植民が行われ、いくつかの町が作られる。
- ・レスボス植民 20 年後にアイオリスの町キュメが建てられた。
- ・キュメから 18 年後にスミュルナがキュメ人によって建てられた。ホメロスが生まれたのはこの頃である。
- ・ホメロスの生まれたのはトロイ戦争の 168 年後である。

次に『歌競べ』をみていきたい。松平氏によれば⁵、この物語は 13 ないし 14 世紀と思われる写本によって伝承されたもので、フランスの学者ヘンリクス・ステファヌスによって 1573 年に初めて刊行された。この物語が話題になるきっかけを作ったのは、ニーチェが 1870 年に古典学雑誌『ライニツシェス・ムーゼウム』誌上に発表した『歌競べ』に関する論文である。彼はこの駄作とされていた作品を、前 4 世紀の弁論家・修辞学者であったアルキダマースの著書『ムーセイオン』に由来することを立証しようとした。ヘシオドスの質問にホメロスが見事に答えている場面をアルキダマースの趣向であろうと推定したという。

『歌競べ』においては最初に二人の出身地が語られる。ヘシオドス自身は自分の生国をアスカラとはっきり言っている。ホメロスの場合は何人かの住人が彼を自国の詩人だと言う。

⁵ 松平千秋訳、『ヘシオドス、仕事と日』（岩波書店、2001）、190-96。

スミュルナの住人は、彼は初めメレシゲネスの名でよばれていたが盲目となってからホメロスと名が変わったと言う。キオスの住人はホメロスの末裔が住んでいるからという理由で彼はキオスの市民だと言うといった具合である。また両親についても様々な説があり、オデュッセウスの子テレマコスこそホメロスの父だとする者もいるという。ホメロスと呼ばれたのは、「盲目」のほかに、彼の父がキュプロス人によってペルシャ方へ人質（ホメロス）として引き渡されたからとする説もあるという。

また普通はホメロスがヘシオドスより時代が古いということになっているが、ホメロスのほうが年下であるとか、同時代の生まれとする説もあるという。同時代に活躍したからこそ「歌競べ」が可能なのではあるが。「歌競べ」に関してはギリシャの群集はホメロスに勝利はあるとするにも関わらず、王は、「勝利者たるべきは戦争や殺戮を縷々として述べる者ではなく、農業と平和の勧めを説く者でなくてはならぬ」（松平訳、132行）と言ってヘシオドスに勝利の冠を与える。この後ヘシオドスは無実の罪によって殺される。3日後、彼の遺体は海豚によって陸地に運ばれ、無実が証明される。ホメロスはその後も遍歴を続け、『オデュッセイア』12,000行を作る。『イーリアス』15,000行はそれ以前に作っていた。最後は神託のとおり、イオス島で最期を迎える。

この物語は無論荒唐無稽であり、ヘシオドスの劇的死などは驚くほどであるが、ホメロスが現実感をもって語られているという意味では興味深い。現実感という点ではプラトン（Plato, 427?-?347B.C.）にも証拠がある。彼の『ヒッパルコス』には、ソクラテスの言葉としてヒッパルコスが「ホメロスの叙事詩を此の地にはじめてもたらし、今日なお吟唱詩人たちがそうするように、パンアテナイの祭りに、かわるがわる後を承けて、それをうたいとおすようにさせた」ことが述べられている⁶。プラトンより少し前のクセノフォン（Xenophon, c.431-c.382B.C.）の『アナバシス』6巻には、『オデュッセイア』、XIII. 75-118を真似て「オデュッセウスのように」⁷という言及がある。この叙事詩が広く知られていた証拠である。

成立過程がどうであれギリシャ文学の始まりはこの二つの叙事詩といわれており、ギリシャにおける「楽園」は、この中に「エリュシオン」や「エリジウム」の名をもつ地として言及されている。『オデュッセイア』第4書、563行では「幸福の野」として言及されているが、英語では“the Elysian Fields”または“the Elysian plain”と訳されており、ここではA.T. Murray訳によってその楽園の説明を引用してみよう。

⁶ 田中美知太郎 他訳、『プラトン全集 6』（岩波書店、1992）、163.

⁷ Jeffrey Henderson, ed., Carleton L. Brownson, tr., *Xenophon* III (Harvard University Press, 2001), 381.

the Elysian plain

where dwells fair-haired Rhadamanthus, and where life is
easiest for men. No snow is there, nor heavy storm, nor ever
rain, but always Ocean sends up blasts of the shrill-
blowing West Wind that they may give cooling to men…⁸

エリジアムの野

そこには金髪のラダマンテウスが住み、人が最も安楽に生きることの
できる地である。そこは雪も降らず激しい嵐も雨もなく、常に
大洋（オーケアヌス）が音高く吹く西風（ゼピュロス）を送り込んでくるのだ、
人に涼しさを与えるために。

この野は選ばれた者だけが行ける場所であった。ここはメネラオスに対して話される箇所
であり、メネラオスがここに行けるのはゼウスの娘であるヘレンの夫だからである。このよ
うな場所については『仕事と日』の五時代説話の第四の種族がいける場所としてヘシオドス
も言及している。

…upon others Zeus the father, Cronus' son, bestowed
life and habitations far from human beings and settled
them at the limits of the earth ; and these dwell with a spirit
free of care on the Islands of the Blessed beside deep-
eddying Ocean—happy heroes, for whom the grain-giving
field bears honey-sweet fruit flourishing three times a
year…⁹

…ある者たちには、クロノスの息子、父なるゼウスは
人々から離れたところに生命と住処を与え、地の果てに
かれらを落ち着かせたのであった。そしてかれらは悲しみのない
精神とともに深く渦巻く大洋の岸辺の祝福された者の島に
住んでいるのだ—かれらは幸せな英雄だ、かれらのために
穀物を生む田畑が 1 年に 3 回実る蜜のように甘美な産物を

⁸ A.T. Murry, tr., George E. Dimock, rev., *Homer, Odyssey*, Books 1-12 (Harvard U.P., 1986), 159-60.

⁹ Glenn W. Most, ed., & tr., *Hesiod, Theogony, Works and Days, Testimonia* (Harvard U.P., 2006), 101 : 166-73. 今後同書への言及は Most と記す。なお引用の数字はコロンの左がページ数、右が行数である。

生み出してくれるのだ。

『オデュッセイア』の「野」と『仕事と日』の「島」は観念としては同様のものであろう。ヘシオドスも第四の種族すべてが島に行けるとは言っていないが、ギリシャ人には安楽に暮らせる楽園が確かに存在していたのだ。ヘシオドスは第二の種、銀の種族の一部にも死後楽園を与えている。彼らは死後地下に住み「祝福された人間」(“blessed mortals,” Most, 99: 141)と呼ばれているからである。「地下」はイメージとして「エリジアムの野」や「島」とはほど遠いと思われるが、死後住む場所があることにおいては第二の種も幸いといえよう。では第一の種はどうだろう。彼らは神にも等しい黄金の種族であり、他の種以上の楽園があってもしかるべきである。しかし彼らには死後住む野や島はなく、

by

the plans of great Zeus they are fine spirits upon the earth,
guardians of mortal human beings.

(Most, 97: 121-23)

かれらは

偉大なるゼウスに従って神聖なる者となり、地上においてのよき者であり、
人間の守護者となるのだ。

第一の種が最も幸せであるべきであるが、彼らは死後楽園には行かない。しかし人間を守護するという点では神に等しい役割をもつことになるだろう。もしそうなら第二の種のほうが第四よりよい世界を与えられるはずだが、地下が「島」より良いとは思えない。この矛盾は五つの時代が必ずしも高貴さの順番ではないということから生まれるようだ。これについては、『仕事と日』のところで述べたい。

いずれにせよ一部の者にとって楽園は存在した。しかしそれは失われた楽園ではないようだ。それはいつだれによって創られたのだろうか。そもそもギリシャにおいて人間はどのように創造されたのか。藤縄謙三氏が人間の起源について十分な説明がないことがギリシャ神話の顕著な特徴だと言っているように¹⁰、ヘシオドスは人間の起源を説明していない。ホメロスの叙事詩については、『イーリアス』が描いているのはトロイ戦争が終わる前の何日間かである。『オデュッセイア』が語るものは何であろうか。オデュッセイが故郷イタケに帰

¹⁰ 藤縄謙三、『ギリシャ神話の世界観』（新潮社、1975）、91。

るまで 20 年をかけなければならないことはゼウスの決定である。しかし 20 年間彼は何を求めて流浪したのか。ギルガメシュと同じように、彼の故郷イタケが彼の楽園なのか。ギリシャの楽園を考えると多様な疑問が出てくる。ギリシャ神話を初めて体系づけたとされるヘシオドスの『神統記』(*Theogony*)をみていきたい。まずヘシオドスとはいかなる詩人か。

(3)

ヘシオドスは自己を語った世界最初の詩人といわれるように、『仕事と日』や『神統記』によって彼の経歴をある程度知ることができる。Tandy & Neale は、『仕事と日』を 700B.C.E.¹¹ のすぐ後にアスクラ の近くで働いているひとりの農夫によって書かれた、と書いている。(Tandy & Neale, 5-6) アスクラ とはボイオテティア地方の都市国家テスピアイの支配下にある村である。ボイオテティアはギリシャ東のアテネの北の地方であり、その地方の主たる都市国家はテーベー神話的にはオイディプスが統治していた国家一である。ヘシオドス自身の言葉にみられる自伝的要素として Most はヘシオドスの生涯の記録を『神統記』と『仕事と日』から 4 箇所選んでいる (Most, xii) :

- (1) 『神統記』, ll. 22-34.
- (2) 『仕事と日』, ll. 27-41.
- (3) 『仕事と日』, ll. 633-40.
- (4) 『仕事と日』, ll. 646-62.

(1) に関しては詳しい説明は後にしたいが、ヘシオドスがどのように詩人となったかを示す興味深い記述なので主たる箇所を引用する。

One time, they [the Muses] taught Hesiod beautiful song while he was pasturing lambs under holy Helicon. And this speech the goddesses spoke first of all to me, … : “Field-dwelling shepherds, ignoble disgraces, mere bellies : we know how to say many false things similar to genuine ones, but we know, when we wish, how to proclaim true things.” So spoke great Zeus’ ready-speaking daughters, and they plucked a staff, a branch of luxuriant laurel, a marvel, and they gave it to me ; and they breathed a divine

¹¹ Before (the) Common [Christian] Era 非キリスト教徒による B.C. に相当する記号。

voice into me, so that I might glorify what will be and what was before, and they commanded me to sing of the race of the blessed ones who always are, but always to sing of themselves first and last.

(Most, 5 : 22-34)

あるとき、ミュージたちはヘシオドスに聖なるヘリコンのふもとで羊を放牧しているときに美しい歌を教えてくれたのだ。女神たちは最初に次のような言葉をわたしに告げた：「野に住む羊飼いたちよ。食べるばかりの生まれの卑しい面汚しよ、私たちは真実に似た多くの偽りを語る方法を知っているが、望むときには真実を高らかに語る方法も知っている。」このように偉大なるゼウスの雄弁なる娘たちは言われた、そして杖、驚くほど茂り豊かな月桂樹の枝をむしりとり、それをわたしに下さった。また私の中に聖なる声を吹き込んでくださった、私が未来のそして過去の物事に栄光を与えることができるように。そして私に命じられた、永遠に生きる恵まれた者たちについて歌うように、が終始一貫して常に彼女たち自身について歌うようにと。

Mostが指摘する(2)からの3箇所は『仕事と日』からであるが、この書物はヘシオドスによって“you great fool” (Most, 111 : 286) と呼びかけられている弟ペルセース (Perses) に対して書かれた体裁をとっている。その弟が父親の遺産を多くとり¹²、ヘシオドスとの間に係争があったことを語るのが(2)の箇所である。(3)は父についての記事であり、ヘシオドスの出身地を語るものなので引用してみる。

Once he [my father and yours] came
here too, after he had crossed over a big sea, leaving behind
Aeolian Cyme in a black boat, fleeing not wealth nor
riches nor prosperity, but evil poverty, which Zeus gives to
men. and he settled near Helicon in a wretched village,
Ascra, evil in winter, distressful in summer, not ever fine.

(Most, 139 : 635-40)

かつて父もまたここに来たのだ、

¹² Cf. Most, 89 : 35-38” let us decide our quarrel right here with right judgments…already we had divided up our allotment, but you snatched much more besides… (ここでわれわれの論争を正しく解決しよう。われわれはすでにわれわれの分け前を分配したが、お前はなお多くのものをひったくり奪いさったのだ。)

アイオリスのキューメを後にして黒い船に乗って大海を渡って、
彼は富や裕福な暮らしから逃げたのではなく、ゼウスが人間に
与える忌まわしい貧困から逃げて。そして父はヘリコンの近くの
惨めな村、アスクラに落ち着いた、冬は厳しく、夏は悲惨で、
常に暮らしにくい村であるが。

ヘシオドスが決して恵まれた家庭の出身でなかったことがわかるが、弟には商売に心に向けるように言い、ヘシオドス自身は海には疎いこと、大海を渡ったのは一度だけであること、その一度が歌のコンテストで優勝した時であったことを述べた箇所が(4)である。ヘシオドスはアウリスからエウボイアに渡るがそこは、

where once the Achaeans, waiting through the winter,
gathered together a great host to sail from holy Greece to
Troy with its beautiful women. There I myself crossed over
into Chalcis for the games of valorous Amphidamas-that
great-hearted man's sons had announced and established
many prizes-and there, I declare, I gained victory with a
hymn, and carried off a tripod with handles. This I dedi-
cated to the Heliconian Muses, where they first set me
upon the path of clear-sounding song. This is as much ex-
perience of many-bolted ships as I have acquired; yet even
so I shall speak forth the mind of aegis-holding Zeus, for
the Muses taught me to sing an inconceivable hymn.

(Most, 141 : 651-62)

かつてアカイア人たちが、冬を通してギリシャから美しい女性たちの
いるトロイへ渡るために多くの軍勢を集めたところだ。
私自身はそこから海を越えてカルキスに渡った、勇敢なアンピダマスの
試合に参加するために。その偉大なる魂をもつ王の息子たちが
多くの賞品を発表し設置していたのだ。そこで私は、はっきり言えば、
歌競べに勝利を得、三つのとつての付いた三脚壺を獲得したのだ。
この壺を私はヘリコン山のミューズたちに奉納した。
彼女たちはそこで私を初めて澄んだ響きを持つ歌の道へと導いてくださった

のだった。私が荒海に耐える多くの釘を打たれた船に乗った
 経験はこれだけであるが、それでもなお私はアイギスを持つゼウスの心を
 語るのだ、なぜならミューズたちが私に驚くべき美しい歌を
 歌うことを教えてくださったからだ。

ヘシオドスはアスクラで生まれた貧しい移民の息子で羊飼いとして育てられたが、(1)にあるように、ある日突然詩人となったことになる。松平氏は(1)に書かれたミューズへの invocation は伝統的形式を踏襲したものではなく、詩人としてたつ決意であり、ホメロス流の「真実に似た虚言」ではなく「真実」そのものを語るという宣言だと述べている¹³。また Brown¹⁴ も単なる文学的技巧ではないとし、エホヴァの言葉がテコアの牧者に入ったようにミューズの言葉が羊飼い、すなわちヘシオドスに入ったのだと言う。テコアの牧者とは旧約の「アモス書」のアモス¹⁵ のことで神の声を聞いたといわれる預言者（神の言葉を預かって語る者）である。エホヴァの語る言葉は真実であるが、ミューズは「真実に似た多くの虚偽」を語る。Brown によれば、ミューズが「真実に似た多くの偽りを語る」ように、ヘシオドスの語る神話は「正統なるもの」を百科事典的に並べたものではなく、「古くからの神話を認識し、それを変化させ、それに新しい創意工夫を加えた創造的再解釈」の結果だとしている。Most は invocation とはせず、'poetic initiation' としてかなり精密な考察を加えている¹⁶。

現代人は人が突然詩人になるということはあると得ないと考えるが、古代においてもヘシオドスの経験は「夢」と解釈されたか、あるいは月桂樹の葉を食べたことから起きる酩酊状態として片付けられたと Most は言う。しかしヘシオドス自身は確かにある異常な経験—その結果として詩を書くようになった経験—をしたことを信じていたという。しばしばこの initiation は視覚の幻覚とされるが、Most は二つの視点で論じている。一つは initiation が三つの段階—1. ミューズの声聞くという聴覚の経験, 2. 月桂樹の杖が足元に横たわっているという視覚のエピファネイ, 3. 過去と未来について詩を作る能力が自分自身にあるという自覚—をもつことである。二つ目の視点は initiation とヘシオドスという名前に関するものである。Most によれば、initiation は常に人生の変化を意味し、人生の変化はしばしば名前の変化という特徴をもつ。ヘシオドスが自分の経験によって名前を変えたという証拠はない

¹³ 松平千秋訳、『仕事と日』, 178-88.

¹⁴ Cf. Norman O. Brown, tr., *Theogony* (Prentice-Hall, 1953), 35-36. 今後同書への言及は Brown と記す。

¹⁵ 「アモス書」第1章、1-2節：テコアの牧者の一人であったアモスの言葉。それは、ユダの王ウジヤとイスラエルの王アハズの子アモスの時代、あの地震の二年前に、イスラエルについて示されたものである。/ 彼は言った。主はシオンからほえたけり エルサレムから声をとどろかされる。羊飼いの牧草地は乾き カルメルの頂は枯れる。(新共同訳による)

¹⁶ Most の initiation に関する説明については、Cf. Most, xiii-xvi.

が、Most はヘシオドス自身ミューズとの経験以後自分の名前の意味をよく理解したであろうと言う。Most の説は以下である。

語源的にいうと彼の名前は“to enjoy” (*hedomai*>*hesi-*)と“road” (*hodos*)の組み合わせのようであり、「旅に喜びをもつ人」という意味になり、商人の息子にふさわしい名である。しかし『神統記』の序文においては彼の名前は特定の全く違った響きをもつ。ヘシオドスはミューズに対して形容辞“*ossan hietsat*” (“sending forth their voice”)を60行足らずの中で4回(10, 43, 65, 67)、それも6歩格の最後の目立つ位置に用いている。またこの2語は語源的にヘシオドスの名前に適している。つまり、*hieisai*, (*sending forth*)はto sendという意味から派生したものであり、*ossan* (*voice*)は*aude*, (*voice*)の同意語である。そしてこれはミューズが彼に与えたとするものであり、語源的にも意味論的にも*avoide*, すなわち *poetry* と関係する語である。したがって“*Hesi-odos*”の語源を“he who sends forth song”としたい。恐らく、ミューズが彼を新しい人生に導いたとき、彼は自分の名に新しい意味を与えたのであろう。父親が彼を商人にしようとした名前は結局彼にとっては実現しないものであり、代わりに詩人としての人生に導いているのを彼は知ったのだ。

このMostの説は極めて文学的だが独創的で説得性もある。ヘシオドスとホメロスの時代の順序についても彼は独特である。この両詩人が同時代人と考えたのは古代や中世の人たちであり、現代は普通ホメロスが年上と考える。しかしそれはヘシオドスが作品の中で自分の名前を明かし、自分に関していくつかの情報を与えることは、主体の発達段階において自己を隠すことより後の段階と考えられるからだとする。彼は文字との関連において考えれば必ずしもヘシオドスのほうが年下とは限らないというが、いずれにしても二詩人の年齢については決めがたいというのがMostの意見である。因みに『神統記』の訳者、廣川洋一氏はヘシオドスのおよその生存年代を前750-680年としている¹⁷。

(4)

では『神統記』をみていこう。Theogonyの意味は“birth of the god(s)”(「神(々)の誕生」)だというのが(Most, xxviii)、この作品はMostによれば「世界の宗教的・道徳的・物理的構造に責任をもつべき神々、その起源と組織を包括的に説明したもの」(Most, xxvi)で、Most編の原典で1,022行からなる作品である。それは事物の存在から始め、ゼウスが至高の権力をもち正義を執行する現存の支配体制を語る時に頂点に達する。まず前述のヘシオドスと

¹⁷ 廣川洋一訳、『神統記』(岩波書店, 2009), 166.

ミュージズとの関わりを含めた *invocation* から始まる。その次に世界の最初の生成が語られる。原初の存在、「カオス」¹⁸ (Chasm), 「大地」(Earth), 「エロス」(Eros) の誕生である。そして「カオス」と「大地」から神々が生まれる。「カオス」からは「幽冥」と「夜」が、「夜」から「澄明」と「昼」が生まれる。

歴史をもつのは「大地」から生まれる者たちである。この者たちの歴史の中では二つの戦いと二つの統治の話が語られる。後者は末っ子の息子による専制君主である父親の追放である。一つは「大地」の末っ子クロノス (Cronus) による、子どもたちを飲み込む父親「天」(Sky) の追放であり、もう一つはゼウスによるやはり子どもたちを飲み込むクロノスの追放である。これらの追放は子から自分の地位を守るためであるが、ゼウス自身は子を飲み込む代わりに、子の母親メティスを飲み込んでしまう。

前者、すなわち二つの戦いの最初はクロノスの子どもたちとタイタン族との戦いである。この戦いは優に 10 年間続くが、Most はこの戦いはホメロスから生まれたトロイ戦争をモデルとしているとよいと指摘している (Most, xxxiii)。この戦いにおいてオリンポスの神々が勝ち、『神統記』はここで終わることもできた (Most, xxxiii)。しかしヘシオドスはそうせずに、「大地」に最後の子テュポエウスを生ませ、この怪物の神との戦いが二つ目の戦いになる。この怪物神への言及の理由を Most は二つ提示している。一つはわれわれすべての最初の母である「大地」に最後の怪物の子を与えることによって「大地」の子孫の話しを終わらせるためであり、もう一つの説明はテュポエウスの誕生はゼウスの武勇を実証する機会を与え、それによって彼が至高の力と統治にふさわしいことを証明することである。確かにこのテュポエウスとの戦いの勝利によってゼウスは神々から絶対の権能を認められるのである。

Brown はヘシオドスが参考にした神話として三つのものを指摘している。ホメロスのもの、認識されていない地域や種族特有のもの、古代の近東のものである。彼は、ヘシオドスの獨創性はそうした神話から役立つものを選択したこと、その選択したものを意味のある構造に組織立てたことにあるとしている (Brown, 36)。Most もヘシオドスが多様な伝承を選択し体系化したとする。それによって消えた伝承もあるが、『神統記』が韻文で書かれた神と宇宙の発生についての最古のギリシャ伝説であることは間違いのないと言う (Most, xxxiv)。『ギルガメシュ叙事詩』に「ノア神話」が出てくるように、神話には相似の話がある。Most は、『神統記』に関しては、*Enuma Elis* というバビロニアの創造叙事詩といくつかのヒッタイト

¹⁸ “chasm” とは「深い割れ目、深い溝」といった意味である。ここでは廣川洋一氏の訳「カオス」を用いた。しかし Most は、しばしば ‘Chaos’ と訳されるがそれは誤解だとし、ヘシオドスは ‘a gap or opening’ を意味していると述べている。(Most, 13)

の神話に極めて似た点があるが、相互の影響関係を証明することはできないとしている (Most, xxxv)。

ゼウスが神々の王者になった後、『神統記』は彼と女神たちとの結婚、その後の神々の結婚、女神と人間の男との結婚などを語って終わる。ゼウスの最初の妻は前述のメティスであるが、彼女はアテナを生み次に乱暴な息子を産むことになっていたが、その前にゼウスに飲みこまれる。(アテナは後にゼウスの頭から生まれる。) 次にゼウスはテミスと結婚し、人間の営みに気を配ってくれるという「季節女神たち」—エウノミア (Eunomia, Lawfulness), デイケ (Dike, Justice), エイレネ (Eirene, Peace)—が生まれる。また「運命たち」が生まれるが、彼女たちは人間に良い運と悪い運を授けるといふ。

『神統記』はゼウスが最高の権威をもつことによって統治される世界を語っているが、その世界の中で人間はどこに位置していたのだろうか。「季節女神」、「運命」の役割によっても、ヘシオドスが神が人間の運命を支配していることを認識していたことは明らかであるが、『神統記』の中でそれが最も如実に表れているのはプロメテウス神話であろう。人間がゼウスから不幸を与えられたのは、人間自身の罪ゆえでなく人間に火を与えたプロメテウスの罪によるからである。メソポタミアでは人間を作るのに罪深い神の血が混ぜられた。ゆえに人間は本来罪をもつ。楽園は初めからないとも言えよう。アダムとエヴァは神に背くことによって楽園を追われる。ゆえに楽園願望は人間の根源に存在する。しかしギリシャ神話では人間は神によって幸福にも不幸にもなる。人間に元々楽園があったかどうかは、人間の創造過程と同様不明である。前述のようにある種の人間には死後行くべき楽園はあるが、普通の人間にはない。しかし五時代説話における第一の黄金の種族は神と同様の暮らしをしており、その暮らしが失われたのはプロメテウスが原因なのか。そのあたりは判然としない。『仕事と日』のところで考えたい。

プロメテウスは「天」と「大地」の子イアペトスの息子であるが、ゼウスが火(よき物)を「地上に暮らす身の人間ども」(“the mortal human beings who live upon the earth,” Most, 49: 564-65)に渡さないで、プロメテウスはそれを盗む。ゼウスはその代わりに、「災い」(“an evil,” Most, 49: 569)を人間に与えようとする。それが「この美しき邪悪なるもの」(“this beautiful evil thing,” Most, 51: 585-6)たる、土から作られた乙女である。ゼウスは彼女を「神々と人間どもがいる場所」(“where the other gods and the human beings were,” Most, 51: 587)に連れて行く。そしてこの女から女性という種族が生まれ、男と共に住むことによって死すべき人間にとって「大きな悲しみ」(“a great woe,” Most, 51: 592)が生まれるのである。「善悪を知る木」の実を先に食べたエヴァによって人間が楽園を追われるのに似ている。キリスト教においては神への信仰によって人は楽園を取り戻すといつてよいであろう

が、ギリシャ神話においては人はゼウスから与えられた悪からいかにして救われたらよいのか。それともオイディプスのように神の与えた運命からは逃れられないのか。それを語ることが『仕事と日』の大きな目的のように思う。

(5)

『仕事と日』は Most 編の原典で 828 行の作品であり、ヘシオドスとの間に遺産をめぐって争いがあった弟ペルセウスに対しての勧告の形をとっている。その勧告は、正義に敬意を払うこととよく働くことである。また農業、航海、その他の経済的、社会的、宗教的行為が成功するためにはいくつかのルールを守ること、物事には良い日と悪い日がありそれを正しく守るためのルールがあること、それを守ることによって成功が達成されることが説かれている。Most は『神統記』と『仕事と日』には連続性があり、前者は神を中心に置いているが後者の中心は人間だと言っている (Most, xlili)。また両方の作品が価値観、特に正義を扱っているが、前者が神の視点における正義であるのに対し、後者は人間の視点で考えているとも述べている (Most, xliiv)。

(4) の最後で述べた人間の「災い」からの救いに集中するために、プロメテウスの火盗みの話に入りたい。まずゼウスは人間に「生命の糧」(“the means of life,” Most, 91 : 42) を人間に与えず隠した。プロメテウスがゼウスを騙したからである。それがなければ人は「一日さえ働けば一年まるまる働かずに十分のものを得ることができたのだが。」(“you would easily be able to work in just one day so as to have enough for a whole year even without working,” Most, 91 : 44-45) しかしそれだけではなく、人間に「致命的な悪」(“baneful evils,” Most, 91 : 49) を計画し火をも隠してしまう。それをプロメテウスは盗み人間に与えるが、ゼウスは怒ってプロメテウスに向かって次のように言う。

“Son of Iapetus, you who know counsels beyond all others,
you are pleased that you have stolen fire and beguiled my
mind—a great grief for you yourself, and for men to come.
To them I shall give in exchange for fire an evil in which
they may all take pleasure in their spirit, embracing their
own evil.”

(Most, 91 : 54-58)

イアペトスの息子よ、誰よりも思慮分別を知っている人よ、

お前は火を盗んだこと、私の心を騙したことで得意になっているが、—それはお前自身にとっても人間にとっても来るべき大きな悲しみなのだ。人間には火と交換に悪を与えよう。かれらは皆その悪の中で精神の喜びを得ることになるのだ、自分自身の悪を抱きながら。

ゼウスはヘパイストスに乙女を創るよう命じる。土と水をできるだけ早く混ぜ、人間の声と力を注ぎ、不死なる女神たちの顔に似た美しい乙女が創られたのである。彼女はアフロディテのように美しく、アテナによって様々な技芸を教えられ、豊かに作られた布を織ることを教えられるが、ヘルメスによって「犬の心と泥棒のような性格」(“a dog’s mind and a thievish character,” Most, 93 : 67) を注がれた。そして神々の使者は彼女に声を与え、パンドラ (Pandora) と名づけた。その意味は (“All-Gift,” Most, 93 : 80) という。なぜならオリンポスの館に住む神々が彼女に「贈り物」を与えたからである。「贈り物」、それはパンを主食としている人間にとっての「悲哀」(“a woe,” Most, 93 : 82) であった。プロメテウス (Prometheus は Forethought の意) の兄弟であるエピメテウス (Epimetheus は Afterthought の意) はプロメテウスからゼウスからの贈り物は決して貰わないよう言われていたにも関わらず、その贈り物すなわちパンドラを受け取ってしまう。エピメテウスが思慮浅い愚か者としても、悪、災い、悲哀という不幸は人間の罪ゆえではなく、プロメテウスへのゼウスの怒りゆえに与えられたことになる。それ以前の人間は幸せであったとヘシオドスの言葉は次のように続く。

For previously the tribes of men used to live upon
the earth entirely apart from evils, and without grievous
toil and distressful diseases, which give death men. [For
in misery mortals grow old at once.]

(Most, 95 : 90-93)

なぜなら以前は人間の種族は悪とは全く無縁に
人間に死をもたらず悲しい骨折りや失意に満ちた病気もなく、
地上に住んでいた。(なぜなら死すべき人間は惨めになれば
直ちに年を取るから。)

この理屈では人間は不死の存在にみえる。がヘシオドスにおいて人間には「死すべき」

(mortal) という形容詞が付くことは絶対的な事実である。五時代説話の黄金の種族も不死ではない。人間が不死でないことはギリシャ人にとっては自明の理であり、問題なのは生きている時の状態といえるのかもしれない。ともあれ女が創られるまで人間は不幸とは無縁の生活をしてきたのだ。女は甕の大きな蓋を動かし、その中身、人間にとっての致命的な悪、を招いてしまった。甕の底に残ったのは「希望」(“Anticipation,” Most, 95 : 96) だけである¹⁹。希望が残ったのは救いであるが、Mostによればそれは必ずしも良い希望だけではない、まさに anticipation であり、悪いことの予想もあるという。しかし予想がつくというのはそれへの対処を考える時間があるという意味では、全くの不運ということではない。これは人間には良い運と悪い運の両方があるという考え方と同じであろう。しかし良い悪いを決めるのが神なのか、人間の責任で決まるのかは定かではない。がここではパンドラ・パンドラ誕生以前の人間・五時代説話との関わりを考えたい。

五時代説話は「神々と死すべき人間が同じ起源から生まれた」(“how the gods and mortal human beings came about from the same origin,” Most, 95 : 107-109) という話しとして語られる。まず最初に創られたのが黄金の種であるが、この人種は「言語を与えられた人間の種」(“the race of speech-endowed human beings,” Most, 97 : 109-10) といわれ、それを創ったものは「オリンポスに住む神々」(“the immortals, who have their mansions on Olympus,” Most, 97 : 110-11) である。この黄金の種の住処および生活は以下のように説明されている：

…just like gods they
spent their lives, with a spirit free from care, entirely apart
from toil and distress. Worthless old age did not oppress
them, but they were always the same in their feet and
hands, and delighted in festivities, lacking in all evils ; and
they died as if overpowered by sleep. They had all good
things : the grain-giving field bore crops of its own accord,
much and unstinting, and they themselves, willing, mild-
mannered, shared out the fruits of their labors together
with many good things, wealthy in sheep, dear to the
blessed gods.

(Most, 97 : 112-121)

¹⁹ Cf. Most, 95n. Mostによれば、「希望」はしばしば“Hope”と訳されるが、ギリシャ語では善だけではなく、悪の予想をも意味するという。それで彼は hope ではなく anticipation にしたという。

まさに神々のようにかれらは生涯を過ごした、心煩うことのない精神をもって、骨折りや失意には全く関わることなく。無益な老齢が彼らを押しつぶすことはなく、かれらは常に手も足も変わらず元気であった、そしてお祭り騒ぎや祝い事を楽しみ、あらゆる悪のない生活を送っていた、そしてあたかも眠るがごとく死んだ。彼らはあらゆる良きものを持っていた：穀物を生み出す畑はひとりでに実りをもたらした、豊かにそしてもの惜しみすることないほどに。また彼ら自身は、意欲的であり、また物腰は穏やかで、労働の結果を多くの良きものと共に皆に分け与えた、羊も豊かに所有し、恵まれた神々にも愛されて。

苦悩のないこうした生活はこの世の楽園であろうが、不死ではない。かれらが地上を去った理由はわからない。死後の彼らについてヘシオドスは次のように語る：

But since the earth covered up this race, by
the plans of great Zeus they are fine spirits upon the earth,
guardians of mortal human beings : they watch over judgments and cruel deeds, clad in invisibility, walking everywhere upon the earth, givers of wealth ; and this kingly honor they received.

(Most, 97 : 122-26)

しかし大地がこの種族を覆って以来、偉大なるゼウスの計画によって、彼らは今地上における美しい聖霊なのだ、また人間の守護者でもある。彼らは裁きと残酷な行いを見つめている、目には見えないが、地上の至る所を歩き、富を与えるものとなっている。この王者のような名誉を彼らは受け取った。

ここでは人は不死を求めてはいない。ギリシャ神話においては死は不幸ではなく、不幸なのは苦痛を伴う死のように思われる。パンドラがもたらしたのは災いではあっても死ではない。これはギリシャ神話における注目すべき点の一つではないだろうか。

黄金の種族が不幸をもっていないのなら、まだ女性はいないということになる。次の銀の時代の創り主もオリンポスの神々であるが、この種族は黄金とは余りに逆の乱暴な種族である。この種族が消えた理由は明確である。

Then Zeus,
Cronus' son, concealed these in anger, because they did
not give honors to the blessed gods who dwell on Olympus.

(Most 99, 137-39)

それでゼウス、
クロノスの息子である彼は、怒ってこれらの種族を隠した、
かれらはオリンポスに住む祝福されている神々を敬うことを
しなかったからである。

銀の種族は神に対しての罪を犯している。滅ぼされる理由がある。しかし彼らは死後地下に住み、「祝福された人間」(“blessed mortals under the earth,” 99 : 141) と呼ばれることになる。銀の種族にとっては地下が楽園ともいえよう。女性の存在は不明である。次の種族は青銅の種族であるが、この作り主はゼウスとなっている。第三の種、青銅の種族は恐るべき暴力的な種であり、お互いに殺し合い地上を去っていく。死後かれらには居場所はない。乱暴なこの種族には当然女性がいると見るべきであろう。

次に来る第四の種族はゼウスによって創られた種族である。

a fourth one, . . . the godly
race of men-heroes, who are called demigods, the genera-
tion before our own upon the boundless earth. Evil war
and dread battle destroyed these, some under seven-gated
Thebes in the land of Cadmus while they fought for the
sake of Oedipus' sheep, others brought in boats over the
great gulf of the sea to Troy for the sake of fair-haired
Helen. There the end of death shrouded some of them, . . .

(Most, 101 : 158-65)

第四の種族…英雄という

神のような種族だ、かれらは半神と呼ばれ、果てしなき大地の

われわれの種族の前の世代の人々だ。邪悪なる戦争と
 恐ろしい戦いがこの種族を滅ぼしたのだ、ある者はカドモスの
 地の七つの門をもつテーベで、オイディプスの羊を守る
 ために戦っているときに、またある者は金髪のヘレンのために
 トロイへと大海の上を船で運ばれていったとき。
 そこで死という終わりの時によって隠された者もいたのだ。

半神、つまり英雄 (hero or heroine) であるが、この種族が青銅の種族の後に来る理由はなんだろうか。それについては Tandy & Neale は二つの理由を挙げている (Tandy & Neale, 70)。一つはトロイ戦争の「存在」を事実と認めるため、もう一つは英雄の子孫だと主張する人々の地位を否定するためである。後者についてはトロイ戦争において英雄はすべて滅びたか、ゼウスによって運ばれたかしているの、その子孫は誰もいないはずなのだ。トロイ戦争には英雄だけではなく人間もいた。つまり第四と第五の種は共存している時代があったわけであり、第四と第五の種は続いてなければならなかったのである。

神の子であるこの種族には当然女性は存在していることになる。女性なしで人の誕生はあり得ないなら、黄金の種族の存続は不可能と思うがこれも不明である。人間創造の神話がない限り、パンドラを含めたプロメテウス神話と五時代説話に整合性を求めることには無理であろう。また、なぜこの説話が神と人間の起源が同じである説明になっているのかも不明である。

第五の種族、それは鉄の種族であり、苦悩に苛まれる現在の人間である。まさにパンドラゆえの苦悩する人間である。では現在の人間は幸福になるにはどうすべきか。人が永遠に生きることでできる楽園はない。それをギリシャ人は受け入れている。しかし苦悩に満ちた生活が幸せであるわけではない。鉄の時代の人間はどうすれば幸福になれるのか。プロメテウス神話は『神統記』においてすでに語られるが、そこでは人間の救いはない。『仕事と日』において、ペルセースへの勧告の形をとってはいるが、人間の救われる道が示される。これは Most がいう二つの作品の連続性の一つの意味になるのではないか。働くこと、それが人間を救う道ではないだろうか。

“Perses, you of divine stock, keep working” (Most, 111 : 299. 「高貴な家柄の出のペルセースよ、働くのだよ」) とヘシオドスは弟に言う。

…so that your
 granaries will be filled with the means of life in good sea-

son. It is from working that men have many sheep and are wealthy, and if you work you will be dearer by far to immortals and to mortals : for they very much hate men who do not work.

(Most, 113 : 305-10)

そうすればお前の穀物倉は生命の糧で十分満たされるだろう。働くからこそ人は多くの羊を持ち、裕福なのだ。そしてもしお前が働くなら、お前は不死なる神々に愛されるであろう、また死すべき人間にも大事にされるであろう。なぜなら彼らは働かない人を非常に憎むものであるから。

働くことが神々の希望であるということは以下の引用にも表現されている。労働をしないこと、すなわち怠惰が「飢え」を引き起こし、それが神々や人間を怒らせるとヘシオドスと言う。

…Famine is ever the companion of a man who does not work ; and gods and men feel resentment against that man, whoever lives without working, in his temper like stingless drones that consume the labor of the bees, eating it without working.

(Most, 111 : 302-6)

「飢え」は常に働くことをしない人の伴侶なのだ。そして神々も人間もだれであろうと、働かずに生きている人に対して憤りを感じるものなのだ。そういう人間は働くことなしにミツバチの労働を食べてしまう針のない雄蜂のような気質をもつから。

「神々も人間も」というところは前に引用した部分と同じであるが、「人間」を入れるのは世間でトラブルを起こしがちの弟ペルセウスに対する言葉として現実味があるといえる。働くことが神々を喜ばせるということは、労働が「正義」につながるからである。この点については必ずしも論理的に書かれているとは言えないが、ヘシオドスの思考の流れを追っていくとそういう帰結になるように思う。「正義」は『神統記』ではゼウスとテミスの娘「季節

女神」の一人ダイケで「人間の仕事」(“the works of mortal human beings,” Most, 75 : 904)に気を配る女神として説明されている。『仕事と日』においては、「正義」はゼウスが人間だけに与えたものであると、ペルセースに以下のように言う。

…give

heed to Justice, and put violence entirely out of your mind.
This is the law that Cronus’ son has established for human
beings : that fish and beasts and winged birds eat one an-
ther, since Justice is not among them ; but to human be-
ings he has given Justice, which is the best by far

(Most, 109-11 : 274-79)

「正義」に

注意を払いなさい。そしてお前の心から暴力をすっかり出しなさい。
これこそクロノスのお子 [ゼウス] が人間のために制定した
法である。その結果魚や獣や翼持つ鳥はお互いに殺し
合うのだ、「正義」が彼らの中にはないからだ。しかし人間には
ゼウスは「正義」を与えたのだ、正義こそ最良のものなのだ。

「正義」は人間に与えられたものであるから、人は動物と同じように暴力を用いてはならないのだ。ヘシオドスは暴力を避けるよう言うてから、「正義」こそ「災い」を遠ざけるものだという。

…those who give straight judgments to foreign-
ers and fellow-citizens and do not turn aside from justice at
all, their city bloom, and the people in it flower. For them,
Peace, the nurse of the young, is on the earth, and far-see-
ing Zeus never marks out painful war ; not does famine at-
tend straight-judging men,nor calamity, but they share out
in festivities the fruits of the labors.

(Most, 107 : 225-35)

外国の者にも同胞にも正確な
正義を与え、正義からまったく道はずさない者たち、

かれらの都市は繁栄し、そこの人々は栄えるのだ。かれらには若い人たちを育てる「平和」が地にあり、はるかを見渡すゼウスも苦しい戦争を与えることは決してない、また飢えも災いも正確な正義を行う人に伴うことはない、かれらは労働の成果を楽しみ宴の中で分け合うことができるのだ。

暴力によって生きようとする者には、ゼウスによって罰がくだされる (Most, 107 : 238-40)。しかし正義を行う者、正義に耳を傾ける者には飢えも災いもやってこない。暴力による生き方をとらない者、すなわち「正義」に従って生きる者は、幸せになるために働こうとする。働くことによって裕福になり飢えからは遠ざかり、神々に愛されることによって災いから逃れることができるからだ。これが「鉄の時代」の人間が幸福になるための方法ではないだろうか。

『仕事と日』は、パンドラ・五時代説話・正義・労働とつながる流れを終えると、様々な人生訓に話しを移し、よき社会生活を送るためのマナーや、農事暦などを語っていく。そして『仕事と日』は次のような言葉で締めくくられる。

These days are a great boon for those on the earth. But the others are random, doomless, they bring nothing. One man praises one kind of day, another another ; but few are the ones who know. One time one of these days is a mother-in-law, another time a mother. Happy and blessed is he who knows all these things and does his work without giving offense to the immortals, distinguishing the birds and avoiding trespasses.

(Most, 153 : 822-29)

こういった日々は地に住む者たちにとっては大きな恩恵となる日である。しかしその他の日は行き当たりばったりであり、運命もわからず、何物をももたらさない。様々な人が様々な日を褒める、が本当にわかっている者はほとんどいない。これらの日はある時は継母になり、またある時は母親になる。幸せで祝福される者は、こういったことすべてを知り、神々を怒らせることなく、鳥を識別し、数々の過ちを避け、自分の仕事をする人である。

以上ヘシオドスの楽園観を探しながら、『神統記』と『仕事と日』を概観したが、この二つの書物とも楽園への関心を示していない。ヘシオドスのみならずギリシャ人すべてにとって楽園は得られるものではないのであろう。人間は「死すべき者」である。まさに人間が創られた時から人間はその運命を背負っている。その創造の話しがないことは確かにギリシャ神話の著しい特徴であり、また楽園に関心がないことの証拠でもあろう。人間は大抵生まれた時は無垢なる楽園をもつものであり、それを失うが故に楽園に憧れるものである。誕生に関心がなければ失うものがないのは当然であり、従って憧れもないであろう。

人間に災いが与えられたのがプロメテウスのせいだとして、その罰たるパンドラがもたらしたものに死がなかったことも、人間が不死とは全く関係のない存在であることを、ギリシャ人が認識していたことの証拠ではないだろうか。しかし、災いは避けたい。ヘシオドスはそのためにこの二つの書物を残したと思いたい。災いを避けるために、人間は正義を行わなければならない。悪や暴力ではなく、正義によって幸福な生活を得るためには、働かなくてはならない。ゼウスから正義を与えられなかった動物とは違って、人間は働き正義を行うことによって神々から愛される存在となる。それが「死すべき人間」の得られる「幸せ」であり、ヘシオドスにとっては鉄の時代の人間が得ることのできる「楽園」ではないだろうか。ホメロスの詩が「秩序の回復」を求めたものであるとして、それは神の秩序なのか、それとも人間の秩序なのか、それはまた気の遠くなるような遠大な問題である。ヘシオドスがホメロスの世界に少しでも光を差しかけることを期待したい。